

10月21日、国吉晶子さんの個展を見に行く。「フレームの出来事」と題した10点。

ひさしぶりに見た国吉さんの絵はあいかわらず美しかった。今回は趣向があつて、案内の葉書にこうあつた。

——「樹木」をモチーフにした絵画作品に取り組んでいる。画面に不均衡に繋がっていく木と鳥を通して「粹」の中に潜む

新世界を描いた。



今回は小品が多かつたせいか、あるいは、フレームの中で枝と葉という具象を選択したせいなのか、その『美しさ』がおとなしく感じられた。以前はキャンパスをはみでる『美しさ』、作品の悲鳴と悦楽の声が、作者の愉楽と精神性の声が聞こえそうな『美しさ』を感じたのだが、今回はその『美しさ』

が声の出自を強調するのではなく、フォルムの美しさを主張しているかのようだった。

画廊に入った第一印象は、フォルムとして存在していることのみずからの存在が制限されてしまったのでは、とおもったり（そのおもいは今も変わらないのだが）、フレームの中の出来事、として制限することでフレームの外の出来事が、観客の想像力に責任転嫁されるという仕掛けがあるのではないかとおもったりしたが、いやいや、国吉さんはただたんに、フレームの中でみずからの在り方を精算しようと試みているだけなのかもしれない、と、いやいやそんなあやふやなことではなくて、フレームの中でしか表現できない色彩とフォルムを見極めようとギリギリの表現を試みているのかもしれない、と、いろいろなことが頭の中をめぐってきたが、目の前の国吉さんには何ひとつ訊けなかった。

絵は、現前の絵は、作者が、観客が、何かを語った瞬間、絵としての輝きを失ってしまうのだから。

表現はどんどん変わっていく。ひと処にとどまる自分を恥じることで人は人になっていく。いや、ひと処にとどまる自分を慈しむことでも人は人になっていく。国吉さんの表現が、キャンパスという自己の制限をはみ出した抽象から、「出来事」と自己規制するフレームの中の具象に変わりつつある現場がこの個展だとしたら、国吉さんのフレームと出来事はどういう変化をしていくのだろうと、抽象好きのほくとしてはすこし残念な思いを抱きながら、まあ、その先を見てみたい、とおもっている。

しかし、あいもかわらず『白』の美しさはみごとだった。枝のたおやかな存在感、葉っぱの屹立する孤独に拮抗するかのように空間が白く塗り込められている。この白の美しさが国吉さんの源流だろう。この白さにビックリして以来、国吉さんの絵にとらわれつづけている。

こんな話、興奮しているのはほくだけだろうし、ほとんどの人は興味ないだろうが、宇宙の最初の星の大きさは太陽の40倍ぐらいだったことが、京大や東大の研究チームが計算できたとめた、と11月11日付の新聞に載っていた。

137億年前のビッグバン直後の宇宙は光のない暗黒時代と呼ばれ、その頃の宇宙の状態は観測することができない。

それでも古い星の観測を通じた推定では、最初の星は太陽の20〜40倍の大きさと考えられていたが、理論上では（計算上では）最初の星は太陽の数百倍の大きさと考えられていて、観測推定と理論の間へだたりがあつた。科学の世界は観測と理論が合致しなければ美しい。

それが今回の、原始星ができてから10万年経った後、初代星はどこまで成長するのかというシミュレーションでは、太陽の20倍程度の重さになったところから、周囲のガスを加熱し、ガスが星に降り積もってくるのを邪魔するようになり、最終的に太陽の数百倍という非常に重い星が誕生することなく、太陽の40倍程度の重さを持つところで成長が止まってしまうことがわかった、ということだ。

そのことによって、観測予測と理論上の計算が一致することになって、観測と理論の矛盾が解消された。あとは、（困難だろうが）観測で証明されることだろう。地動説同様、日々の暮らしにはなんの関係もないことではあるが、そうなんだそうなんだ、と宇宙の始源の姿に思いを馳せてわくわくした一日だった。

リリアーナ・カヴァーニという女性監督の第一回目の監督作品『愛の嵐（1973年・イタリア）』のなかで、ナチス将校相手に、上半身裸で、サスペンダーでズボンを吊った姿でナチ帽を被り、マレーネ・ディートリッヒの「望みは何かと訊かれたら」を歌うシャーロット・ランプリングは美しかったし、官能的だったし、その特異な設定もあつて、圧倒的な存在感があつた。

その後、シャーロット・ランプリングは『さらば愛しき女よ』とか、大島渚の『マックス、モン・アムール』などで主役を張っていて、それなりにおもしろい映画ではあつたが、彼女自身は『愛の嵐』の存在感を超えることはなかった。で、すっかり忘れていた。

そのシャーロット・ランプリングに11月2日、TVのBS放送で再会した。『スイミング・プール（フランスワ・オン監督、2003年、フランス・イギリス）』。

すっかり歳をとった（ぼくより2歳年上だから、撮影当時57歳）シャーロット・ランプリングは衰えた体をスクリーンに晒

したりしていたが、共演の若い女優の弾けるような肉体の前では少々残酷だった。それに彼女の体は若いころも弾けるような肉体ではなくて、成熟と未成熟が互いに否定するようなコケティッシュな裸体だったので、いまだに年老いた体を晒すこともないのに、とついおもってしまった。それに映画自体もたいしておもしろいものでもなかった。強烈な一本を見てしまうと、それ以後はどうしても褪せてしまうものだ。

ミステリー作家サラはシリーズ物の小説がマンネリ化し、そのうえ、新人作家も台頭してきていて、出版社社長との関係もなんとなく曲がり角で、という設定で、そんな彼女が新しい作品を書くために出版社社長にすすめられて、ロンドンから彼の別荘のあるフランスの田舎にやってくる、という書き出し。

静かな環境で彼女の新作は進むのだが、ある日、出版社社長の娘ジュリーがやって来る。ジュリーは性的に奔放な娘で、毎夜、男を連れ込んでサラの執筆の邪魔をしはじめた。

しかし、事件は何も起こらない。中年のサラが、奔放なジュリーの日々を、嫌悪と羨望の思いで見つめる日日が延々とつづくだけだ。

歳がいくということは、幾分かの知恵が蓄積される代償として自分の望みのいくつかを断念しなければならぬことでもある。性への願望があっても、それを実行するには躊躇があり、想像力だけで断念してしまう、というサラだが、ぼくのような即物的な人間は、生きていること自体が恥だとおもってしまう。ばそこそこの欲望は実行できるだろうに、とおもってしまうのだが、サラは虚数的な感情を身にゆだねていて、実数と表裏一型として納得いくものだった。

若くても、少々年老いたとしても、人間、そう自分の思わくどおり自分を軸に回転できるものではない。ジュリーだって、村の食堂のウェイターを思わくどおりに扱えなくて殺してしまふ。サラは好意を寄せていたウェイターの始末をしながら、若くて奔放な、たぶんかつての自分のようなジュリーを征服した感情に陥っていたにちがいない。サラはジュリーの殺人を隠匿することで、非倫理的、非社会的行為を自分が引き受けることで、生きていることのささやかな充足感に浸ることができたのだろう。人はそういう悪意を吐瀉することで生の充足感を得ることができるともある。

そういう屈折した虚数的な感情がこの映画の唯一の取り柄だとおもわれたのに。(シャーロット・ランプリングにそういう姿を求めていただけだったのかもしれないが)

ジュリーが別荘を後にした後、サラは『スイミング・プール』という小説を書き上げ、出版社の社長のもとに持っていく

体的な断念を自己充足の手段に変えているようだった。
(虚数とは英語で 'imaginary number'、想像上の数。二乗するとマイナスになる数)

ジュリーの生態に興味を持ったサラはシリーズ物のミステリー小説を書くのをやめ、ジュリーの物語を書きはじめる。が、そのことを知ったジュリーは、腹いせのように、サラが好意を寄せている村の食堂のウェイターを誘うのだが、成り行きでウェイターを殺してしまう。

事件は何も起こらないとおもっていたし、サラの虚数的な感情がこの映画のめざしているところだとおもっていたら、それが、最後の最後、ラスト間際で、ジュリーの殺人が行われ、それを知ったサラは死体を埋め、ジュリーの殺人をなかつたものにしてやうとする。サラがおこなう共犯意識は、サラ自身の倫理観への悪意の実証のようなものだろうか。

そういえば、オープニング、別荘にやってきたサラは寝室に架けてあった十字架を外して机の引き出しに入れるシーンがあるのだが、いつ、悪意と共に非倫理的な行為をおこなうかもしれない、というサラ自身の心構えを表明しているシーン、だったのだろう。この世間の「正しさ」などいかにほどのものだろう、と。

サラは著名なミステリー作家だが、殺人と捜査だけの自分の作品にうんざりしており、アルコール依存気味で、マリファナを常用していて、ロンドンの地下鉄でファンらしき女性に「あなたを知っている」と言われても「人違いだ」と席を立ったり、初めてのフランス行きを心配する老父に「だれとも会わないか

が、社長は、ミステリー小説を望んでいて、その作品を評価しようとしないう。サラは、そのことを予測していて、その原稿はすでに別の出版社から出した、と本を見せる。なんか、余計なシーンだった。まあ、出版社社長との決別、あるいは、ミステリー作家としての自己との決別、を意図しているのかもしれないが、まあ、どうでもいいシーンが終わりにくついていた。

で、さらに余計なシーンがラストのラストにくつつくのだが。サラが出版社を後にしようとしたとき、社長を訪ねて歯列矯正器具をした地味な小太りの娘がやってくる。それが社長の娘だということ、さっきまで見せつけられていた別荘での出来事は、ジュリーの殺人も、サラの共犯関係も、サラの書いた作品だった、というどうでもいいオチがついていて、シャーロット・ランプリングはやっぱ『愛の嵐』だったなあ、とTVを切ってしまうしかなかった。

かわいそうに

どうしてこんなことになってるんだらう

小さな子どもがたんすと壁のすき間で眠っている

目尻には涙の跡があるし

こんな狭いところに自分で入れるとも思えないので

だれかに押し込められたんだらう

わたしが手を伸ばして子どもの肩をつかんだら

汗で湿ったTシャツがもわっと生温かくて

一瞬 嫌悪感がよぎる

よほど疲れていたのか

わたしがからだをゆさぶっても

子どもは目を覚まさない

なんとか引きずり出して抱き上げると

子どもは眠ったまま本能的にわたしに抱きついた

この独特の重みが

いとおしいのか 鬱陶しいのか

わたしは判断に迷う

床に下ろして

背中を壁にもたせかけたら

子どもは目を覚ました

まんまるい目を見開いて

わたしをじっと見ている

わたしのことを何だと思ってるんだろう

おとなは自分を可愛がって当たり前だと思ってるのか？

黙っているとしたら物体のくせに

質量mの物体Mを高さhの位置から自由落下させたとき――

質量mの物体Mを初速度vで壁に向かって投げたとき――

のが怖いからほとんどの人は負の感情を抑制して暮らしている。

日々の暮らしが実数の世界ならば、隠匿した負の感情の世界は虚数的世界といっているだろう。二乗してもマイナスの世界でしかない、世間的には後ろ向きな、虚数の世界だろう。その、普段は、日々の暮らしの中では、つねに隠匿されている虚数的感情が顕在化する時がある。日々の暮らしの清潔さ、窮屈さ、理路整然さ、毅然さかげんにふと嘘つぽさを覚える時がある。そんなとき堰を切ったように虚数的感情がこみあげてくるのだ。

そう、ぼくらは虚数的感情なしでは生きていくことができない。実数だけでは日常はなりたたないのだ。そのことに気づいている人はすくない（いや、ほとんどの人が気づいているのに、気づかぬふりをしている）。

あのホーキングは、ビッグバンの特異点をなくすには虚数時間を設定すればいい、と言っている。ということ、ぼくたちの生きていくこの時間は虚数であることになる。また、量子力学の祖であるシュレーディンガーの、極微の世界を支配する基礎方程式・シュレーディンガー方程式($i\hbar\psi = H\psi$)には虚数単位「i」がついている。このことはぼくたちが構成している原子の世界は虚数なくしては表現できない、と言っていることだ。このように虚数はもうすでに、幻の数ではない。

野田さんのこの一冊には、実数の世界という虚構の世界を虚数的感情で描くことの怖ろしさと、不気味さと、凝視しなければならぬ正しさの揺らぎを、少々戯画的ではあるが、日々の暮らしというフィルターにかけて濾過した姿が提示されている。

別に実験がしたいわけじゃないが

世界はもうじき滅びるそうだから……

しかし小心者のわたしは

窓に近づきカーテンをそっと閉めた

転載したのは野田順子さんの詩集『うそっぶ』（土曜美術社出版販売）の中の「物体M」全篇。

もう、だれもが知っていることで、すでに数限りなく言及されていることではあるが、小さな子どもはおとなを籠絡する邪気を持っている。嘘、へつらい、おもねり、自己顕示、自分本位、おとなに依存しなければ生きていけない子どものそれらの擬態をおとなたちは許容してこの日々の暮らしが営まれている。許容されている限りは子どもの擬態は市民権を得ている存在である。そういう日々の暮らしをぼくたちは日常と呼んでいて、倫理的にも社会的にも負の感情が優先されるのを慎重に避けている。

それは実数の世界である。整数だけで生きていくのは少々しんどいときもあるから、有理数までは許容範囲だろう。いや、無理数までは大目に見ているかもしれないが、虚数部分は隠匿するにやぶさかではない。あえて、虚数部分を顕在化することはない。そうでなくては、日々の暮らしは秩序と理性と清潔さを保てない。ここところが人間が人間と呼称される由縁のところだろう。

それでも、ときどき、隠匿していた負の感情を吐瀉する者がいる。それは反社会的だと糾弾され、消去される。消去される

中井ひさ子さんの詩集『思い出してはいけない』（土曜美術社出版販売）も虚数的感情が支配している一冊だった。

子どもは、自分は拾われてきた子どもだとか、母親に愛されていない子どもだとか（だから王子様が助けに来てくれるとか）、自分を悲劇の中に遊ばせて空想する楽しみを持っている。それがおとなになり、悲劇などというものはなく、わたしという存在が生きている世間は楽劇でも悲劇でも笑劇でもなく、陳腐な茶番劇であることを知る。母親はときどき、自分を愛してくれない存在として立ち現れるかもしれないが、王子様がやってきて幸せになる確証はない。そうかといって、憎い母親に焼けた靴を履かせて殺すこともできない。

母親が猫撫で声で、「お食べ」と甘くてキラキラ光っている水砂糖を差し出したら、それが自分を殺す策略かもしれないとおもわれても、ついその策略に乗ってしまう。理由はふたつ。甘くてキラキラしている欲望に負けることと、母親の絶望をやらせてやること。なにしろ、年取って、女の性から後退はじめている母親は自分の腹から出てきた子どもに羨望のまなざしをむけているのだから。そんなまなざしで見つめられた子どもは、母親の不幸を解消してやらなければと、その不幸はいずれ自分の不幸に繋がるかもしれないからと、ついついそんな虚数的感情に取りつかれてしまう。

初夏の

風と呼ばれて

ベッドを 窓際に移し

映りすぎる

鏡は 部屋の隅っこに

ああ 疲れたと

座り込んだら

これ お食べ と

かあさんが

小さな壺から氷砂糖を

ひょいと 一欠けら

口にはうりこんでくれた

横で見つめる

ネズミにも

ひょいと 一欠けら

氷砂糖はからだの中で

透明になっていく

からだも

透明になっていく

ネズミはもう見えない

わたしの頭はもうない

もうすぐ足も消えるな

楽になったかい？ と

鏡の中で

あの子も 消えたまま
この子もと
指を折っている
かあさん

〔氷砂糖〕全篇〕

わたしは、いくら頑張ってみたところで、わたしという姿を他者なしでは統一することができない。鏡という他者を通して自我の形態は統一することはできるが、それはあくまで形態だけだ。だから「映りすぎる鏡は部屋の隅っこに」片づける。

わたしという全体像を統一できる最も近い他者は母親である。しかし、母親はわたしに一番近い存在だ。わたしのなにもかも知りつくしている。他者などとはとてもおもえない。

そんな母親が疲れているわたしにつけ込んで、一欠けらの氷砂糖を「お食べ」と差し出す。しょうもないネズミにも。氷砂糖はキラキラ光っていて美しいし、その甘さといったら諭えるものがない。体のなかで透明になっていく氷砂糖と同じようにわたしも透明になっていく。それは快いことだ。きつと鏡に映ることもないだろう。他者の目に怯えて暮らすこともなくなるだろう。ああ、やっぱり母親は母親だ。「楽になったかい？」こんななまでわたしのことを気にかけてくれてくれたなんて。二乗してもマイナスの値にしかならない虚数の世界は（だれにも言えないが）快い。快い。

母親の立場からいえば、自分にうりふたつな娘の存在は二乗してもマイナスの値しか持たない虚数の世界においておきたい。だから、「お食べ」。

最近TPPとかがニュースになっている。環太平洋戦略的経済連携協定というそうだ。加盟国の間の工業品・農業品・サービスなどの関税を撤廃して人や物が自由に往き来しよう、ということらしい。世界は一つ、という発想らしい。これで、日本の技術力を生かした工業品が関税なしに世界と競争できて、日本の経済は潤う、という期待があるらしい。

とはいっても、昨日（11月25日）のNHKのTVニュースでやっていたのだが、タイが洪水にあつて、進出している日本企業の生産がダウンしてしまい、タイにあった工場を日本で再開するにあたって、タイ人の技術者を日本に呼んで、日本人に技術講習をおこなう、というものだった。タイ人の技術者は日本に来るにあたって、タイ国での10倍の給料を保障されているそうだ。すでに技術は加工や賃金の安いタイのような国に移ってしまい、日本での技術力は失われている、という現実が一方にはある。

TPPは経済の国境をなくそう、ということだろうが、国境を壊して富の流通だけをおこなおうとしているのではないのか。金を後ろ盾にして、富のある国が領土の拡大を図っている、ぐらいにしかおもえないのだが。

TPPで日本の農業が壊滅する、と案じている人たちがいる。経済にはまったく疎いし興味がないし、新聞やTVをそんなに熱心に読んだり見たりしていないから、TPPで農業がダメになる、という議論に首を突っ込む資格はないのだが、大規模農場で大量生産された農産物が関税なしで日本に入ってきたら、

高齢化と減反政策で身動きのとれない状態に陥っている日本の農業は壊滅する、と案じられている

小学校のころ、兼業農家、というのを習った。

21歳のころ、土佐山田町という小さな町の臨時職員をしていたとき、秋になるとまとめて休暇を取る職員がたくさんいることを知った。昭和40年代初めのころだ。彼らは兼業農家だった。自宅で栽培した稲を刈り取るために休みを取っていた。

いまま兼業農家はたくさんいる（ネットで調べたら、専業農家45万人、兼業農家118万人だそうだ）。自分たちが食べる農産物を作って、余ったら市場に出す。そういうやり方で昔から農産物が流通している。

道の駅、という施設が全国に乱立している。高知でも国道や県道沿いに数え切れないほどある。流行っている施設やそうでない施設があるようだ。ここでは、地元の人が働き、地元で採れた農産物が売られているし、地元農産物を材料とした食事が提供されている。あるいは、地元農家の主婦のグループが自作の農産物のオリジナルレシビを考案し、農産物の販売に一役買っているところもある。

そういうふうに地元の人の雇用がおこなわれ、地元の農産物が販売されているが、そういう地産地消型の雇用や販売によって現在の農業は支えられている。

その仕組みが最善であるかどうかは分らないが、外国から安い農産物が入ってきて市場論理だけの取り引きがおこなわれることよりも、豊かな仕組みだとおもう。ひとが農産物と共に生きていくんだ、と実感できる仕組みである。たとえ大きな儲

けはなかったとしても。

小泉という人が市場原理主義を声高に騒いだが、その結果がどうなっているのか、だれもが知っていることではある。人は市場原理主義を第一義として生きていかななくてもいいとおもう。日本の農地は狭くて大規模農業が行えないことも、外国産の農産物に打ち勝てない理由だろう。最近では、高齢者が放棄した農地を買い取って会社組織で農業をやる場所も出てきているそう。そうすると、若者の雇用にも繋がる、らしいが、農家の人には土地への愛着があつて、なかなか他人に売ろうとしないらしい。先祖伝来の土地を自分の代で売り払うことに後ろめたさがあるらしく、なかなか土地を手放そうとしない。それに減反政策に協力すると政府からお金がもらえる。

野田首相がTPP参加に関して「日本の美しい農村は必ず守る」と言ったそうだが、なにか美しいのだろうか。たしかに段々畑など稲穂が実っている風景をTVでみるのは美しい。しかし実際に高齢者が段々畑を耕し、収穫する労力は「美しい農村」などと言えるものではない。それに農業は天候任せだ。豊作不作が繰り返されている。

野田首相、というか、日本の国を守るべき、というか、日本という国が生きていくための源泉として考えるべきことは、「日本の美しい農村」などと「耳に快い言葉ではなく、「美しいときもあるが、残酷なときもある農村」だともう。アメリカのように、小型飛行機で空中から農薬を散布する効率性や、遺伝子を組み合わせる害虫を寄せ付けない品種や天候に左右されない品種を作ったりする賢明さに目をくれることもなく、日

気を再生産することなしにそのまま30%減の電力でまかなっていく文明を考えてみてはどうか。

それは経済の分からない文化系の世迷い言で、「そんなことでは世界のなかで日本が生き残っていない」という反論は「経済通」の人から出てくるだろうが、世界の中で生き残っていないなくても、30%減の文明をそこそこ生きていけばいいのではないかと、経済音痴の文化系はそうおもっている。

ほくの場合、衣食住がそこそこ叶えられて、あとは、月3冊ぐらい買える本代と本誌の印刷代ぐらいあれば生きていくのだが——あ、そんなきれいな生活ばかりで生きているわけでもないで、それなりに、そこそこの欲望への消費もあるわけだし、ひとに言いたくないささやかな楽しみもあるのだが、まあ、そんなに浪費するような欲望でもないで、とりあえずはそれぐらいの楽しみでも生きていける、とおもっているのだが、そうではなくて、世界を股にかけて物流戦略の最前線の仕事をしたとおもっている人は、30%減の文明なんてバカなことを言うなよ、ぐらいいつもいるだろう、きっと。

大学生の就職がなかなかうまくいかないということがニュースになっている。最近に限ったことではないだろうが、大学へ行くことが一種の投資となっていて、いい大学を出たらそれに見合った就職先に就職することが彼らの欲望になっているのだろう。有名大学を出たからには官僚に、とか（ひと昔前は「末は博士が大臣か」と言われた）、商社や銀行や自動車メーカー、

本の農業はこれから先も、後継者問題と耕作面積と収穫率の問題に悩まされながら困難な道を歩いていくだろう。どこに「美しい農村」があるのだろうか。

日本の米はおいしい、と中国の富裕層に買われているという。おいしい米は海外に輸出して、日本人はおいしくない米を食べるはめになるのだろうか。

生産効率が悪くても、流通効率が悪くても、身の回りの物を食べて生きていくことで、日本の農業は生きながらえていくようにおもえてならない。

経済のグローバル化ということが言われている。国境を壊して世界を一つにしようという発想らしいが、日本には何百年、何千年と培ってきた日本独自のシステムがある。そのシステムのおかげで日本は今日までやってきた。地域によって文化が違うのは当然である。たとえばアメリカの文化、たとえばインドネシアの文化、そして日本の文化、それぞれの国にはそれぞれの文化や規則や習慣があり、それらによってその文化圏で生きる人々は無意識のうちに規制されている。一見、自由に物事を考えたり行動したりしているように見えるが、それらの行動や思考は、それぞれの文化圏の規則や習慣によって制限されている。そのシステムを壊してまで世界の経済が一つになる必要があるのだろうか。

ほくは前に30%減の文明、ということを使った（もう少しいつと30%減の欲望にもとづく文明）。原子力発電で失われる電

器メーカーに就職し、日本の経済を主導したい、とおもっているだろうが、この不況下という願いが叶えられないようだ。だったらここは発想を転換して、大学を投資先と見なさないで、大学は学問を修得する場である、とだけ認識し、商社や銀行に就職先を求めるところではなく、出身地の小さな会社に職を求めて、そこそこの暮らしをたてるのはどうだろう、とおもっているのだが、そんなことはいらぬお節介りで、彼らは投資に見合う就職先で、日本と世界の架け橋になりたいと若い夢を育てているのだろう。

最近、社内では英語しか使わないという日本の企業が増えてきたという。少子化で国内での生き残りが難しくなってきた、という理由で、海外に製品を売らなければならない、そのためには常日頃からビジネス語としての英語が堪能でなければ役にたたない、ということだろう。それに優秀な人材であれば日本人でなくてもいい、ということ。社員の半数が外国人という企業もあるそうだから、社員同士のコミュニケーションのために英語が必須になってきているのだろう。

たしかに世界で生き残っていく企業をめざすなら、世界中どこへ行ってもタフに仕事のこなせる人材がほしいだろうし、国籍なんて関係ないだろう。もつといえ、優秀な人材なら社員全員が外国人でもかまわないだろう。それに、海外で製品を作ることで企業に利益があるなら、工場丸ごと海外へ、というのも企業の論理からすればなにもおかしいことではない。実際日本の企業は、中国からタイに軸足を移していて、今回のタイの被害では部品調達すらままならなくなっている企業がある。

ホリエモンがTVに頻繁に顔を出していたころ、会社は株主のものだから、収益をあげない会社は会社ではない、というような風潮があった。投資している人間が優先されるべきで、働いている人間は収益をあげる駒のひとつでしかない、と言ってようなホリエモンの発言を何回も聞いた。

アナログ人間のほくにしてみたら、虚数の世界の話を聞いているみたいだった。

たぶんフリードマンの新自由主義を手本にしていたのだろうが、あのころは小泉・竹中の新自由主義路線が、日本が培ってきた文化をことごとく壊していた時代だった。たしかに、日本の文化は他を排除するという欠点や、規制（あるいは、既成）に守られているという弱点はあったが、それなりの機能は果たしていたとおもうので、ゆるやかな変化でよかったのではないだろうか。それを性急な新自由主義で「壊すこと」が日本の唯一の生き残る道だと強引な政策を推し進めた。それに乗ったホリエモンのような人たちがいた。ホリエモンは失敗したが、オリックスや楽天やソフトバンクなどはうまく立ち回ったのだろう、しっかりと生き残っている。

最近では日本の企業のトップにも外国人が就任している。有名なところでは、経営危機に陥った日産自動車を立て直したといわれているカルロス・ゴーンだろう。彼は日産自動車を立て直したと経営者の鑑のようにいわれているらしいが、つまるところ、外注コスト削減やリストラで、ひとの暮らしを削り取って会社の利益だけをあげただけではないか、とぼくはおもっている。

最近では日本の企業のトップにも外国人が就任している。有名なところでは、経営危機に陥った日産自動車を立て直したといわれているカルロス・ゴーンだろう。彼は日産自動車を立て直したと経営者の鑑のようにいわれているらしいが、つまるところ、外注コスト削減やリストラで、ひとの暮らしを削り取って会社の利益だけをあげただけではないか、とぼくはおもっている。

い人、健康な人に病気の人や障害者、有名大学を出ることができない人や高校へさえ行けない人、さまざまながいる。

企業が果たすべき責任とはそれらの人すべてが暮らしている雇用を用意することとおもうが、なかなかそういうふうにはならないようだ。

利潤を上げることが第一義になっているが、企業が利潤をあげるためには社会全体が豊かであることが必要ではないだろうか。企業がどんな製品を作り出しても、それらを購入できる社会的基盤がなければ販売不振で企業は利潤をあげられない。そうすると「日本はダメだ。海外をターゲットにしろ」と外国へ持つていった一部の富裕層に売り込むことになる。そのためには英語の喋れる社員が必要だし、海外で交渉できるタフな社員が必要ではない。企業には人材を一から作りあげる余裕はない、ということ、（企業にとって）優秀な大学卒だけが求められるのが現状ではないかとおもう。

そんな世の中はつまらなくもおもうのだが。

健康者も障害者も、自分を表現できる人も、できない人も、自分を売り込める人も、引込み思案の人も、大学卒でも中学卒でも、そんな若い人たちを、企業も含めた世間全体で育てていく、というのが本来の社会のあり方ではないだろうか。そんなふうにして社会全体が豊かになっていく。そうすると、購買力が社会全体につき、企業の製品が売れる。企業には他者を蹴落とすような儲けよりもそういう社会を実現する責務がある、とおもうのはほくひとりだけだろうか。

強者だけが生存できるようなフリードマンの新自由主義経済

いる。そんな人間が年間8億9000万円もの報酬を得ている。こんな不思議なことがまかりとおっている世間である。

有名大学を卒業した若い人たちがどんな世界観を持っているのかしらないが、社内言語は英語で、半数の社員が外国人というような会社を見たとき、彼らにとってはその会社のクオリティは結構高いんじゃないかとおもう。世界を舞台に仕事ができるとおもうだろう。だからそういう会社に入社したいと願うだろう。

そういう会社のトップはネガティブなことは言わない。いつも攻撃型でポジティブな発言で新入社員の交感神経を刺激しまくるだろう。若い人は自分の未来にはなにかが待っているという、自分と社会への期待感があるから交感神経を刺激されまると昂揚感が全身を覆ってしまうだろう。そんな状態で「我が社が競争するのは世界だ。世界で仕事ができない人間しか必要ではない」とかなんとか、一応「成功者」と言われている人がまくしたてると、自分の可能性をここで試したい、とおもってしまうだろう。日本の経済を動かしてみたいという欲望にとらわれてしまうだろう。そしてつい錯覚してしまう。「成功者」に求められている自分ほど有能で優秀な人間はいない、と。

彼らの本音は自分たちの会社さえ利益をあげれば、日本という国に住んでいる人たちがどうなるうとかまいやしない、ということだろうか。訊いたことがないので真意は分からないが、遠くから見ているとそんなふうにおもえる。

日本には英語の話せる人、話せない人、若い人、年配の人、自分を主張できる人、できない人、意欲のある人、意欲のない

はそろそろ終わりにしてはどうだろう。

なにを第一義に考えて生きていくのかということだけの話だが、日本人1億2千万には1億2千万の考え方があって、ほくのようなネガティブな発想が支持を受けることはごくごく僅かの日本人しかいないだろう。それに文明は発展しはじめたらみずからの過剰で崩壊するまで前進するしかないの、30%後退なんていうのは、文明の本質が分かっている者の戯言にすぎないのだろう。しかし、それでも、原子力発電をやめた後の30%減の電力でまかなえるような文明でやっていく知恵は出そうとおもえば出てきそうな気がするのだが。

今年の夏は節電の夏だった。電力会社の「計画停電」という奇策が成功して日本中「節電・節電」と慌てふためいた。今年の冬も節電の冬だ、と世間ではささやかれている。そういうふうに煽って、電力会社はふたたび原子力発電が必要だという世間の声がよみがえってくるのを待つ作戦なのか、それともほんとうに電力が足りないのか、ほくにはわからないことだが、国や電力会社が「節電・節電」と言えば言うほど、ばかばかしい冬がやってくるのだなあ、とついおもってしまう。

その原子力発電をめぐって、吉本隆明が「バカなことを言っている」と非難の的にさらされている。

60年代70年代、吉本にはいろいろなことを教えてもらった。とはいっても彼の本は難しく若いころは手も足も出なかったのだが、最近では年の功で、人さし指ぐらいでちよっかいが出るようになってきた。

このごろ世間では、文章はわかり易さを第一義にしたほうがいいという風潮があり、難しい表現は避けて、中学生でも分かるように噛み砕いた安易な文章、わかり易くて、かつ深い文章で、だれが読んでもわかる文章で表現したほうがいい、と。たしかになにかの解説本ならそれもいいだろう（池上某という人が引つ張りだのだが）が、個人の内面にかかわることは、そんなに噛み砕いて語れるものではない。

わかり易さを第一義とした文章の本は、読む人の読解力をその人の知性の限界にまで押しあげることはないだろう、とほくはおもっている。分かりにくさによって鍛えられる知性や感受性もある。

日本という国を素手で捉え直し、つねに原理的に考え抜く、といった吉本の態度は若いぼくには刺激的だった。そんなぼくとしてはすこし気になったので、その発言をネットで探して読んでみた。（8月5日付、日経新聞）

最近吉本を読まなくなったので、最近の吉本の考え方には疎いのだが、この発言だけでどうのこうのと言うこともないのだが、読んだ第一印象は、まあ、吉本ならこれぐらいのことは言うだろう、と。

もともと吉本は「反・反原発」の人だ。科学技術の進歩を信じているという東京工業大学出身の彼は、「チエルノブイリ原発のようなものは確率的にはあと半世紀は起こらないし、原発問題にそれほど本気にならないのは、科学技術の進展が一举にこの問題を解決してしまうことがありうるとおもうからだ」という80年代の発言で「反・反原発」の立場をとっていたのだが、

今回その目論見が破綻して、科学技術が一举に問題を解決することもなく、事故が起こってしまった。

で、吉本を批判している人たちは、今回の3・11を目の前にして、「まだ血迷ったことを言っているのか」ということらしいが、吉本は、一度言いだしたことは絶対に曲げない人だ。相手に罵詈雑言を浴びせてでも自分の言い分を通す人だ。

もともと、吉本の「反・反原発」についてのいくつかの発言はぼく自身ちよつと首肯できないことがおかつたので、ずっと無視してきたのだし、今回も無視してしまうしかない、とおもった。

が、以下の二カ所、気になったので。

「原発をやめる、という選択は考えられない。発達してしまつた科学を後戻りさせるといふ選択は、人類をやめろ、といふのとおなじだ」「科学者と現場スタッフの知恵を集め、お金をかけて完璧な防禦装置をつくる以外に方法はない」

後者は無理な話である。「完璧な防禦装置」は不可能である。そんなことは吉本にも分かっているのに。

前者は、「そんなにまでして人類は生きていかなければならないのか」といふ立場のほく、30%減の文明でいいじゃないかという立場のほくから言わせれば、「人類やめたつていいじゃないか。文明も人類はいずれ滅ぶんだし」といふことになるのだし、「後戻りしても、賢い人類はそれなりに非文明を生き延びる道を考案するだろう。人類ほど狡猾で賢明な生き物はいないのだから」といふおもってしまったのだが。